横浜市立 上川井小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ～ 3 年度 ）

重点取組分野	令和　元　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①一人ひとりのよい面を認め、自己肯定感や有用感を育てる。道徳等で学習したことを日常生活に生かしながら、社会規範を遵守することの大切さや他を思いやる気持ち等心の育成を図る。②異学年交流により、感謝の気持ちをもち、それを伝え合うことで、豊かな人間関係の構築に努める。	規範意識をもつことについては、課題が残っている。発達段階に応じた目標を設定し、守ることを積み重ねていく必要がある。年間を通した異学年交流を継続することで、上級生には責任感や思いやりの気持ちが育ち、下級生がその姿を見ることもよりよい成長に繋がっている。	B
生きてはたらく知	①「上小Homework」の継続、チャレンジカップの充実によりメタ認知を高める。②ユニバーサルデザインを生かした授業づくりを工夫し基礎、基本の定着を目指す。③重点テーマを「言語を通して自分の思いを伝え合い、豊かな人間関係作りができる子の育成」とし、言葉を大切にしながら主体的な学び を目指す。	「上小Homework」は家庭学習の習慣化と基礎・基本の定着に役立っているが、直しや提出の確認、自力解決が難しい児童への対応は課題が残る。人前で話す機会を増やすことで、話すことには慣れてきたが、語彙力や正しい言葉の使い方には課題が残っている。	B
特別支援教育	①特別支援教室を充実させ、主に算数を苦手とする児童の「わかる・できる」に繋げ、基礎・基本の定着に生かす。②合理的配慮や自閉症理解の研修の場を設定する。③管理職、専任、SCや担任との連携を密にし、担任や子どもの困り感をケース会議で取り上げ、問題が小さいうちに解決する。	『誰もが利用できる「さくら教室」』という意識が定着してきた。意欲的に取り組む児童の姿が多くなり自信にも繋がった。担任と「さくら」担当者の情報交換も密に行われている。今後も本校の特色として継続させる体制作りが課題である。	A
健やかな体	①学校保健委員会のﾃｰﾏに沿って、毎食後の歯みがきを徹底し、家庭との連携のもとむし歯のない子をめざす。②「もぐもぐタイム」を全校で設定し、単に残量0を目指すのではなく、時間内に適量をバランスよく食べることを大切にする。③全校児童で縄跳びや持久走に取り組み、体力の向上を図る。	給食後の歯磨きの時間を設定し、毎日の歯磨きを徹底できるようにした。歯磨きソングを活用し、丁寧に磨くことへの意欲を高めてきた。全学年とも給食残量は殆どないが、食べる量に偏りがある。1月には「体力アップ月間」を行い、持久走や縄跳びに全校児童が意欲的に取り組んできた。	B
地域連携学校運営協議会	①地域のクリーン作戦、ボランティア体験活動や地域行事等に、児童が積極的に参加する。②地域の歴史、戦争体験の話や書写指導等、「地域の先生」を積極的に活用する。③「地域・学校防災の日」の訓練内容をより充実させ、保護者や児童の防災に対する意識を高める。	地域行事への参加については引き続き、声をかけていく必要がある。地域・学校協働本部を立ち上げ、学校ボランティア組織を構築した。学習や行事などの場面で、地域、保護者が学校に入り関わることが増えた。	B
児童生徒指導	①一人ひとりが安心して自分らしく楽しい生活を送れるようにする。②互いを認め合える雰囲気や安心して話せる環境づくりを行う。③どの職員も同じ意識で指導にあたれるように、「上小スタンダード」の設定や児童の実態について共通理解を図る。	児童が安心して学校生活を送れるよう、問題行動を未然に防ぎ児童の悩みに寄り添うために、教職員間の情報共有を密に行った。児童の意識は少しずつ高まっているが、大人が見ていない場面での行動については課題が残る。保護者とも共通理解を図りながら指導、支援を行っていく必要がある。	B
人権教育	①若葉台特別支援学校との交流を通して、他を思いやる心、互いを認め合う心を育てる。②子ども同士が違いや多様な考えを認め合い、安心して自分を表現できる授業環境をつくるとともに、子どもが「できた」「わかった」「認められた」と感じられる体験を通して、自尊感情や人権意識を育めるようにする。	小規模校の特色を生かして、様々な学習、行事等を通して、児童、教職員、保護者が互いに認め合い、尊重し合えるような人間関係が築ける活動を行った。次年度は東京オリンピック・パラリンピック開催に合わせ、さらなる体験活動を通して、児童の人権意識をより高めていきたい。	B
自分づくり	①自分理解、他者理解の上に自分らしさを発揮し自己実現に向け、様々な人や地域社会と積極的に関わっていくようにする。特に総合的な学習の時間、特別活動等において体験的な学習を通し、自分を見つめることができるようにしていく。	「上小フェスティバル」では、学習したことを生かして体験的な学習の場を設定した。地域の人や保護者に参観してもらい、相手を意識した発表をすることができた。しかし、まだ自分に自信が持てない子も多い。一人一人が生き生きと生活できる場や認め合いの場を設定することで自信を持たせたい。	B
いじめへの対応	①一人ひとりが「学校に自分の居場所がある」「自分にはいいところがある」と実感できる受容的な環境をつくる。②小規模校のよさを生かし、全教職員が子どもに関わり、情報を共有し、児童理解をする。また、定期的な「いじめ防止対策委員会」の開催や児童への生活アンケートを通しいじめの未然防止、早期発見に繋げる。	全職員が情報を共有することで様々な場面での児童への声かけや対応がきめ細やかに行われ、それがトラブルの早期発見、いじめの未然防止に繋がっている。小さなことでも共有してチームで対応していくことが実践できている。それが、子どもだけでなく大人の安心感に繋がった。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①職員のバーンアウトを防ぎ、児童と向き合う時間、授業準備のための時間を確保するために、行事等の精選や効率的、効果的な会議等、働き方改革の実践を目指す。②主幹や主幹候補が中心となり若手職員への指導助言を積極的に行い、互いに切磋琢磨できる場と環境を作っていく。	全職員が共通理解をすることで、協力体制ができている点は小規模校のよさが生かされている。経験の浅い教員の育成については、色々な立場や経験からのアドバイスをして、全職員で育てる意識が見られた。ステージに沿った学校運営について一人一人が意識していくことは引き続き必要である。	B
学校関係者評価	言語環境を構築していくことについては、生まれてから家庭の中で育まれるものでもあることから、学校だけでなく家庭の協力が欠かせないと考える。「規範意識を育てる」ことに関しては、学校教育目標のもと、地域の人も一緒に、よい、悪いを伝えていく必要がある。学校、家庭、地域で連携して子どもに声かけをしていく環境を一層整える必要がある。「上小フェスティバル」では、どの子も明るく生き生きとしており、発表の言葉づかいもよかった。よく考え、調べてきたことを、自ら率先して発表する姿も見られた。		
評価結果に対する学校の見解	本校では小規模校の特性を生かして、クラス、学年の枠を超えて、全教職員が全児童と関わって児童理解を進めていることが効果を高めている。また、様々な場面での児童への対応がきめ細やかに行われ、それがトラブルの早期発見、いじめの未然防止に繋がっている。それが、子どもだけでなく大人の安心感に繋がった。課題点は、「規律ある態度を育てていくこと」である。規律を守ることの大切さは実感しているものの、大人が見ていない場面での行動については課題が残る。保護者、地域の方と共通理解を図りながら指導、支援を行っていく必要がある。		
中期取組目標振り返り	「上小ホームワーク」の取組は、家庭学習の習慣化と基礎・基本の定着には成果があったものの、家庭での自主学習への取組については課題が残る。本校は異学年交流が活発で全校児童同士の交流が多いため、他者の気持ちを尊重しようとする子が多い。しかし、まだ自分に自信が持てない子も多いため、一人一人が生き生きと生活できる場や認め合いの場を設定することで自信を持たせたい。書写指導や社会科、読み聞かせ等地域の方の関わりが定着しつつあるが、さらに様々な場面で地域の力を活用していきたい。		

重点取組分野	令和　2　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①発達段階に応じた目標を設定し、きまりを守って生活することの大切さや他を思いやる気持ち等心の育成を図る。②年間を見通した異学年交流を行うことにより、互いの気持ちを伝え合うことで、豊かな人間関係の構築に努める。	コロナ禍の中でも小規模校のよさをいかし、年間を通した異学年交流を継続することで、上級生には責任感や思いやりの気持ちが育ち、下級生がその姿を見ることもよりよい成長に繋がっている。年間の見通しがもてるよう、交流などは、学年として足跡を残しておけるとよい。	B
生きてはたらく知	①「上小Homework」に加え、読書タイムを活用し、学習と読書の習慣化を図る。②学習の中で、子どもに身につけさせたい言語能力を明確にし、相手意識や目的意識をもった言語活動を効果的に取り入れた単元構成を工夫することで、子ども達の表現力や言葉を介したコミュニケーション能力を高めていく。	特に算数では、家庭学習の習慣化と基礎・基本の定着につながった。「チャレンジカップ」を通して学ぶ楽しさと意欲に繋がった。話し合い活動や発表など、コロナ禍で制限が多かったため、引き続き相手意識や目的意識をもった言語活動を継続していく。	B
特別支援教育	①特別支援教室を充実させ、主に算数を苦手とする児童の「わかる・できる」に繋げ、基礎・基本の定着に生かす。②合理的配慮や自閉症理解の研修の場を設定する。③少人数やT.T.を取り入れ、個に応じた細やかな指導を行う。	特別支援教室では児童の実態に合わせ学習を系統立てることにより、どの段階で支援が必要かを見極めることにつながった。児童の「わかる・できる」に繋がったことは、大きな成果と言える。少人数指導 では学習状況に応じてスモールステップで進めるようにした。	A
健やかな体	①学校保健委員会のﾃｰﾏに沿って、身の回りの衛生について考えさせ、家庭との連携のもと衛生的な生活習慣の確立をめざす。②適量をバランスよく食べることを大切にする。③全校児童で縄跳びや持久走に取り組み、体力の向上を図る。	手洗いをする時間を設定や正しい手の洗い方、ハンカチチェックなどの取り組みにより、手を洗う習慣は身についてきた。1月には「体力アップ月間」を行い、縄跳びに全校児童が意欲的に取り組むことができた。	A
地域連携学校運営協議会	①地域の歴史や魅力を再発見する等、地域に目を向ける活動を通して地域を理解を深める。②地域との交流をつなぐために学校からの情報発信を行う。③「地域・学校防災の日」の訓練内容をより充実させ、保護者や児童の防災に対する意識を高める。	地域に出て活動することはあまりできなかったが、各学年の地域との関わりについて計画は立てられている。日頃お世話になっている方へ一人一人が手紙を書くことで、感謝の気持ちを伝えることができた。また、学校便りを通じて地域へ学校の様子を発信できた。	B
児童生徒指導	①一人ひとりが安心して自分らしく楽しい生活を送れるようにする。②互いを認め合える雰囲気や安心して話せる環境づくりを行う。③どの職員も同じ意識で指導にあたれるように、「上小スタンダード」の設定や児童の実態について共通理解を図る。	全職員が気になる点を共有し、保護者とも共通理解を図りながら指導、支援を行ってきた。そのことが、子ども達が安心して楽しく過ごすことにつながってきている。一方、挨拶をすることの大切さは理解しているが、「自分から進んで」「顔を見て」することの意識はまだ低い。	B
人権教育	①子ども同士の交流を通して、他を思いやる心、互いを認め合う心を育てる。②子ども同士が違いや多様な考えを認め合い、安心して自分を表現できる授業環境をつくるとともに、子どもが「できた」「わかった」「認められた」と感じられる体験を通して、自尊感情や人権意識を育めるようにする。	小規模校の特色を生かし様々な学習、行事等を通して、なかよし班での遊びや交流を軸とし、相互理解が深まる取り組みを行った。他者を認めるという気持ちの上での土壌はできてきているが、多様さや人権に対する知識も身につけていけるよう、計画していく必要がある。	B
自分づくり	①自分理解、他者理解の上に自分らしさを発揮し自己実現に向け、様々な人や地域社会と積極的に関わっていくようにする。特に総合的な学習の時間、特別活動、等において体験的な学習を通し、自分を見つめることができるようにしていく。②キャリアパスポートを活用してじ目当てをもって生活できるようにする。	体験的な活動に制約が多かったが、調理員さんへの感謝のメッセージを伝えるために、クラスごとにアイディアを出し合って動画を作成するなど積極性が見られた。キャリアパスポートの記入を通して、自分のよさを見つめ直す機会をもつことができた。	B
いじめへの対応	①小規模校のよさを生かし、全教職員が子どもに関わり、情報共有、児童理解に努める。②定期的な「いじめ防止対策委員会」の開催や児童への生活アンケートを通しいじめの未然防止、早期発見に繋げる。③チーム対応を原則とし、ケース会議を適宜設け、課題解決する。	全教職員で児童の情報を共有し、一人一人の頑張りやよい面を認め、保護者との連絡も丁寧に行ってきたことが、いじめや不登校を防ぐことに繋がった。チームで対応する姿勢が定着しているので、トラブルが大きくなる前に解決できている。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①児童と向き合う時間、授業準備のための時間を確保するために、ICTを活用し、効率的、効果的に業務を進め、働き方改革の実践を目指す。②各自がステージを意識した上で、全職員で経験の若い職員に指導助言を積極的に行い、互いに切磋琢磨できる場と環境を作っていく。	ICTの活用が進み、zoomやアプリを使ったプログラミング学習などの実践が昨年より多くなった。また、ミライムを活用することにより、打ち合わせの時間を週1回に短縮することができた。経験5年未満の教職員に対して、色々な立場や経験からのアドバイスを日頃から行い、全職員で育てる意識が見られた。	B
学校関係者評価	学校の教育方針と取組がよく伝わってきており、様々な制約がある中でも対策をとって教育活動が行われている。上小スタンダード、ICTの活用等、上川井の中で、今の時代に合ったスタイルで授業が行われていることも素晴らしい。学習時は各学年とも特色のある方法で一人一人が意見を言えるように進められていた。また、クラスの雰囲気がよく、子ども達がリラックスして学習をしている印象だった。 地域も児童の安全を守るために、見守りパトロール以外にも通学路の安全を意識して活動していくなどして、学校と地域で協力して今後も児童を見守っていきたい。		
評価結果に対する学校の見解	様々な制約がある中でもICTの活用等、できる活動を増やすことができた。学習時、一人一人が意見を言えるようになってきたことはよいが、自分の考えを相手に分かりやすく伝えられているかについては、語彙力の低さも含めて課題が残る。クラスの雰囲気がよく子ども達がリラックスして学習をしていることについては、子ども達を全教職員で育てるという意識をもち、チームで対応する姿勢の成果と考えられる。地域が児童の安全を考えているということを機会があるごとに子ども達に伝えることで、感謝の気持ちをもつこと、登下校時の歩き方や挨拶の向上につながっていくことを期待したい。		
中期取組目標振り返り	子ども達の表現力や言葉を介したコミュニケーション能力を高めていくために、話し合いや言語活動を通して、子どもに身につけさせたい言語能力を身に付けていくことを、来年度も継続していく必要がある。全職員が情報を共有することで様々な場面での児童への声かけや対応がきめ細やかに行われ、それがトラブルの早期発見、いじめの未然防止に繋がっている。小さなことでも共有してチームで対応していくことが実践できている。コロナ禍で様々な活動に制限はあったものの、一方でICTの活用が進み、zoomやプログラミング学習などの実践が昨年より増加した。来年度も継続していきたい。		

重点取組分野	令和　3　年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①各学年の発達段階に応じた目標を設定し、きまりを守って生活することの大切さや他を思いやる気持ち等心の育成を図る。②年間を見通した異学年交流を行うことにより、互いの気持ちを伝え合うことで、豊かな人間関係の構築に努める。	年間を通し、異学年の交流を計画的に行うことで、上級生の責任感や思いやりの気持ちが育まれる機会にできた。交流の内容については、意図的に話し合いの場面を設けるなど、互いの思いを伝え合えるような時間を増やしていけるよう改善の余地がある。	B
生きてはたらく知	①「上小Homework」の継続、チャレンジカップの充実や読書タイムを活用し、学習と読書の習慣化を図る。②身につけさせたい言語能力を明確にし、相手意識や目的意識をもった言語活動を取り入れる。単元構成を工夫し、子ども達の表現力やコミュニケーション能力を高めていく。	「上小Homework」「上小チャレンジカップ」の継続により、学習の習慣化と算数や漢字等の基礎・基本の定着につながった。相手に伝わるように、言葉を通して自分の思いを伝えるという点については、本校の課題となっており、今後も学校全体で取り組んでいく必要がある。	B
特別支援教育	①より個に応じた特別支援教室を充実させ、系統立てて支援することにより主に算数を苦手とする児童の「わかる・できる」に繋げ、基礎・基本の定着に生かす。②実践に生かせる研修の場を設定する。③少人数やT.T.を取り入れ、個に応じた細やかな指導を継続する。	「さくら教室」では、個に応じた教材の工夫と環境整備により、「できた」を感じながら意欲的に取り組む姿が増えてきた。全校児童で継続的に「コグトレ」に取り組み、楽しみながら認知機能の向上を図った。関係機関との連携により、支援策の検討を図ることができた。	A
健やかな体	①学校保健委員会のﾃｰﾏに沿って、身の回りの衛生について考えさせ、家庭との連携のもと衛生的な生活習慣の確立をめざす。②適量をバランスよく食べることを大切にする。③全校児童で縄跳びや持久走などに取り組み、体力の向上を図る。	正しい姿勢の保持を意識する取り組みを通して、よい姿勢の大切さを理解し、自身の姿勢を改善する習慣が身についてきた。また、年間を通して「体力アップタイム」を行い、縄跳びを全校児童が意欲的に取り組むことができた。※感染症による制限や活動の中止もあった。	B
地域連携学校運営協議会	①地域の歴史や魅力を再発見する等、地域に目を向ける活動を通して地域を理解を深める。②地域との交流をつなぐために学校からの情報発信を行う。③「地域・学校防災の日」の訓練内容をより充実させ、保護者や児童の防災に対する意識を高める。	秋になってから、低学年を中心に地域へ出かける学習が行われた。地域の方との関わりは、感染状況を鑑みて控えている状況だが、日頃お世話になっている方へ一人一人が手紙を書くことで、感謝の気持ちを伝えることができた。また、学校便りを通じて地域へ学校の様子を発信できた。	B
児童生徒指導	①一人ひとりが安心して自分らしく楽しい生活を送れるようにする。②互いを認め合える雰囲気や安心して話せる環境づくりを行う。③「自分から進んで」「表情を見て」挨拶することのよさを理解し、実践できるようにする。	全職員で児童の様子や問題行動を共有し、対応を統一することで、組織として児童指導にあたることができた。定期的にスタンダードの見直しを図り、職員が同じ意識で児童の規範意識を高めていくことが課題である。進んで挨拶することへの意識が少しずつ高まっている。	B
人権教育	①子ども同士の交流を通して、他を思いやる心、互いを認め合う心を育てる。②違いや多様な考えを認め合い、安心して自分を表現できる授業環境をつくるとともに、自尊感情や人権意識を育めるようにする。③人権週間などの機会を生かし、知識としても多様さや人権について触れる機会を設ける。	行事や異学年合同の学習を通して、他学年の交流の機会が持てた。下学年の児童を思いやる姿や、上級生を見習おうとする姿が見られた。人権教育の活動で、自尊感情を高めることができた。年間を通して人権意識を高めていくことが今後の課題である。	B
自分づくり	①自分理解、他者理解の上に自分らしさを発揮し、様々な人や地域社会と積極的に関わっていく。特に総合的な学習の時間、特別活動、等において体験的な学習を通し、自分を見つめることができるようにしていく。②キャリアパスポートを活用し、自分のよさや得意なことを見つけられるようにする。	制限が多く、難しい点も多かったが、各学年で体験活動の内容を工夫しておこなってきた。キャリアパスポートの記入により、自分の学習や生活の様子について振り返り、新たな目標をもつことにつながった。自分の成長に気付く機会として、有効活用していきたい。	B
いじめへの対応	①全教職員が子どもに関わり、情報共有、児童理解に努める。②定期的な「いじめ防止対策委員会」の開催や児童への生活アンケートを通しいじめの未然防止、早期発見に繋げる。③チーム対応を原則とし、ケース会議を適宜設け、課題解決する。	日常的に職員間で児童の情報共有が密に行われ、専任を中心に対応策について協議できたことがいじめの早期発見と組織対応に繋がっている。今後、立場の弱い者への偏見をなくし、いじめに対する児童の意識をさらに高めることが必要である。	A
人材育成・組織運営（働き方改革）	①児童と向き合う時間、授業準備のための時間を確保するために、ICTを活用し、効率的、効果的に業務を進め、働き方改革の実践を目指す。②各自がステージを意識した上で、全職員で経験の若い職員に指導助言を積極的に行い、互いに切磋琢磨できる場と環境を作っていく。	ICTの活用が進み、オンライン研修も効果的に行うことができた。これにより、時間を有効に使えるようになった。 ブロック研を定期的に行うことで経験の浅い職員も見通しをもって働くことができ、授業や児童指導等についても意見交換ができるようになった。具体的な相談、助言の場となった。	B
学校関係者評価	今年度も実際に子ども達と関わる機会が少なかったが、学校だよりの記事を見ると、子ども達がしっかり成長しているように感じた。幼稚園と小学校の交流では、はっきりと話し、優しく接する姿が見られた。小規模校のメリットを生かした独自の施策を有効に実施しており、きめ細かい指導がなされていることが分かる。 今後も学校教育目標の実現を目指し、子ども達の思いを大切にして学校運営を進めて行って欲しい。また、夢や希望をもち、明るく成長してほしいと願っている。地域としても、登下校時等にできるだけ子ども達と会話をするようにし、見守っていきたいと考える。		
評価結果に対する学校の見解	各分野に関して、学年や分担の枠を超え、共に考え取り組んできた。児童指導やいじめ対応については、全職員が児童のことをよく知り、変化にも気付くことができるので、早期に対応できている。また、特別支援教育についても、児童の実態に合った指導により、達成感を得ている児童も多い。これらは、小規模校のよさが表れている取り組みであると考える。相手に伝わるように、言葉で自分の思いを伝えるという点については近年の課題となっており、今後も学校全体で取り組んでいく必要がある。学んだことが学校外でも生かされ、お世話になっている地域の方とも楽しく豊かに会話できるよう育てて		
中期取組目標振り返り	小規模校の良さを生かし、全職員で全児童を見守り、育てることができた。学習面においては、全校で「上小ホームワーク」「上小チャレンジカップ」の取り組みにより、家庭での学習習慣の定着につながり、基礎学力の向上につながっているものと考える。また、心や体の成長、児童指導面でも共通理解を図り、柔軟に対応してきている。これらの取り組みが、児童の安心感につながっているものと考える。次年度以降は、課題となっている表現力や言葉を介したコミュニケーション能力の他、主体性や粘り強さなど、児童の自立に向けた取り組みも考えていきたい。		